納所浩氏の記した逸話によると、当社の随神門を建設するにあたって、吉備津彦神社の随神門を模倣しようと検分したと記してある。比べて見ると、屋根が瓦葺きと銅板葺きの違いこそあるが、細部に渡って良く似た造りとなっている。

吉備津彦神社の随神門

近衛府（このえふ）

律令制下における令外官の一つで、宮中の警固（けいこ）や天皇が行幸時の供奉（ぐぶ）にあたった。

親衛の職として中衛、外衛、授刀衛（じゅとうえい）などが置かれたが、天平神護元年（765）に授刀衛が近衛府と改称された。

舎人（とねり）

天皇、皇族などに近侍し、警固や雑事を取り扱った。衛府の兵士などの総称。

随　神　門

正面から向かって右側に祀られている矢大神

正面から向かって左側に祀られている左大神

神輿庫（しんよこ）と神輿（しんよ）

神輿を安置する建物を神輿庫（しんよこ）という。神輿（しんよ）は民間では（ミコシ）といわれ、起源は不明とされるが、奈良時代から用いられ、平安中期に盛んになった御霊信仰（※ごりょうしんこう）とともに地方へ普及した。

神輿が用いられる前は、神霊を勧請するために、榊に鏡を取り付け、これを馬などに乗せるのが普通であった。

神輿は種々の形があるが、基本的には台と胴と屋根の三部構成で、台に二本の棒を縦に貫き、これに横棒を取り付けることもある。木製で四角、六角、八角などがあるが、四角が一般的である。

神輿には蕨手（わらびて）（屋根の四隅から出ている渦巻きの付いた飾り木）が屋根の下から出ている京神輿と蕨手が屋根の上から出て鳳凰（ほうおう）の尾が下に流れている江戸神輿とがあり、当社の神輿は京神輿のようである。

神輿を担ぐ者は若者とする所が多く、よく荒れるが、これを人々は神意の具現と認め、神輿振（みこしふ）りともいった。

当社の神輿庫は都窪郡誌によると、明和四年（1767）に建築とあるが、「早島沿革」には神幸祭が始まった寛保元年（1741）に「神輿庫梁行二間、桁行二間創立」とあるので、明和四年の時は修理を建築の誤記か、或いは火災などにより建て替えられたのかも知れない。

神　輿　庫

神輿庫に安置された二基の神輿（右:鶴崎神社、左:八幡神社）

当初の神輿庫は大正期の写真を見ると、鹿島神社参道の石段左側の玉垣部分に建設されていた事が窺える。

鹿島神社の玉垣は、大正十五年四月に建立されているので、その時に現在の場所に移して改築したものと思われる。

その後、屋根が老朽化して雨漏りが発生したため、平成十四年十二月に本葺き瓦から平葺き瓦に改め改修した。

修復に出される神輿（昭和 57 年 6 月 24 日）